

兵庫県における冬虫夏草^{*}

付. コガネムシの冬虫夏草とコガネムシを食べるについて

高橋 寿郎

兵庫県における冬虫夏草とコガネムシの冬虫夏草

夏には草として実を結び、冬には虫と化して動きまわるといふ意味の中国名であるが、昆虫やクモ類から生えるキノコ(子の菌類)の総称で日本ではわりと種類が多く、既に300余種が記録されているとある(清水大典, 1994)。

本来は冬虫夏草の名称は中国奥地に産するコウモリガの幼虫に生じるもので、海拔3~4,000mの高山帯に特産分布するものであったが、現在では上記にのべたように昆虫やクモの他、一部菌類に寄生する同属のキノコの総称として扱われる。中国では、この冬虫夏草が長命強壯の秘薬として取り扱われ、薬としても珍重されているようで現在でも大いに珍重されると同時に、ものによってはかなり高価で販売されているようで、ためにでんぷんで作った偽物の冬虫夏草が市場に出現したりしているようである。

我国へは、慶長12年(1607年)中国から長崎へ李時珍の大著「本草綱目」が渡来して家康に献ぜられた。これが原典となって日本でも本草学が発展を始め冬虫夏草の名も広く日本に知られることになった。享保13年(1728年)には四川省産の現物が日本に届いたほか多くの本草書や「冬虫夏草図」(柚木常盤, 1801)、「千虫譜」(栗本瑞見, 1812)、雲錦随筆(暁晴翁, 1861年)などあいついで本邦産の冬虫夏草が紹介された。

冬虫夏草は薬用として古くから記述があり、四川省産のヨトウムシの一種の幼虫に寄生するそれは薬効が高いと云われている。難波恒雄はその薬能、用途について色々と記している(1980)。“肺、腎を益し、精髓を補い、血を止め、痰を化し、勞

咳をとめ……”等々長々と効能をかかっている。恰好が良いことからセミタケは珍重されているようであるが、その効能は「本草綱目」によればテンカンやヨナキに効能があるとか。とにかく冬虫夏草が薬として効能があるのかないのか良くわからない。中国では長命強壯の秘薬としても珍重され、又は中国の王宮料理にも重用されたとか冬虫夏草のスープ料理は世界最高の珍味としてよく知られている等々色々云われているが、どれも今一つ吾々には良くわからない点が多くある。

冬虫夏草は一般的には空中湿度が高く、空気が清浄で適当な樹陰(散光)地帯、広葉樹林が有力な候補地であると云われており、東海地方とか中部地方の自然状態の良い所に多く見られるようであるが、発生環境はかなりデリケートで簡単に説明出来ない点が多くある。

発生の場所とか時期、周期などまだまだ良くわかっていない点が多くある。

さて、この冬虫夏草の兵庫県下での記録はどんなものであろうか貧弱な筆者の所有文献から拾ってみたものを此処に紹介しておきたい。

先ず一番古く、また数多く記録された人として大上宇一を挙げなくては行けない。大上宇一は菌類については色々と研究をしたようで「二千菌譜」(1923)のような書をまとめ、その中で冬虫夏草を156種も記録しているとある(大上宇一, 1922)。この「二千菌譜」と云うのは直接見ていないのでどのような記録の仕方をされているのかわからないが1992年の「大上宇一」の中では(p. 87)セミタケが図説されており、大上が発見の冬虫夏草15種の新種が記載されているとあり、その一部の和名も示されている(p. 88)(仙台第二高等学校教授安田 篤に送付した菌類403種の内に上記冬虫夏草の15種の記載がされているとある)。また、大上宇一が東

* 兵庫県甲虫相資料・329

京文理大 小林義雄に送付した *Cordyceps* 属の各種菌類の中にコエビガラスズメの蛹茸があることは山本義丸がのべている(1953)(東京文理大理科紀要 Sect. B. No. 84. 1941)。大上宇一の記録以後、兵庫県での冬虫夏草の報告というものは意外と少ない。1953年、山本義丸が氷上郡妙高山(標高564 m)中腹にてコエビガラスズメの死蛹に冬虫夏草が出来ているのを採集したと図をつけて示された。同時に同じものを大上宇一が1918年に採集していると報告(これは小林博士の論文によって)しておられる。

1972年、大平広士は篠山中野付近でハチタケを採集発表した。

1977年には山西 元が淡路島洲本市柏原山(標高569m)にてカメムシタケを採集している。

筆者も1975年頃から何年間に佐用郡大撫山にオサムシ掘りに出掛けていたが其処でオサムシが冬季成虫越冬しているのを掘り出すのであるが土中にある関係でオサムシタケが出来ているのに割合と出会った。その内いくらかは図示して紹介したが(1982)その気になって探すともっと見つけることが出来たのではないかと思っている。兵庫県下からの冬虫夏草の記録は僅かに以上のようなものである。

清水大典の「原色冬虫夏草図鑑」の中でイトヒキミジンマリタケと蟻に出来た冬虫夏草が神戸と四国香川県から僅数の記録があるとあった(pl. 92, f. 186, 260, p. 293-300)。いがいと兵庫県下での冬虫夏草の記録が少ないように思われる。一般にあまり注意していないからとも思われるが、県の中央部から北の方には注意すればまだまだ見つけることは出来ると思う。

さてコガネムシの冬虫夏草と云うのは筆者は採集したことは無いが、余り見つからないものかどうなのか、コガネムシの幼虫は土中生活者が多いので当然多く見られるかと思ったのであるが、こちらも意外と少ないように思われる。その中でもなかなか面白いと思った冬虫夏草が若干見られたので簡単に紹介しておく。

1952年に松井一郎はヒメコガネらしきものの幼

虫の胸部に冬虫夏草と思われる3つの突起物があるのが紹介されていた。1979年の清水大典の解説書はコガネムシタンポタケと云ってやはりコガネムシの幼虫の頭部や尾部から発生しているもの(タンポ型)、同じくコガネムシ科幼虫の頭~頸部から発生するハリタケ型のマルミノコガネムシタケと云うのが図説されている(p. 63, 68)。

また極く最近出版された清水大典の原色冬虫夏草図鑑の中でなかなか立派なコガネムシに発生する冬虫夏草がカラーで図説されている。1979年に図説されたコガネムシタンポタケ(p. 61, f. 170)、マルミノコガネムシタケ(p. 79, f. 212)が美しいカラーで示されているが他にもハグロコガネムシタケ(p. 61, 251, f. 170)、ヤエヤマコガネムシタケ(p. 62, f. 172, 251)、ケンガタコガネムシタケ(p. 73, pl. 199, 266)等々いずれもコガネムシの幼虫に発生するものであるがカラーで図説コガネムシタケとして成虫に発生する素晴らしい冬虫夏草(p. 53, 240, f. 151, lex. は台湾産)がカラーで図説されており、やはりコガネムシにもこのような冬虫夏草があるのだと感心させられた。

コガネムシを食べることに關して

昆虫を食料に供する習俗は一般には奇習とみなされる傾向がある。これほど地上に多い昆虫を何故に従来食料としてあまり利用しないのかと云うと、第一に必要な量を集めることが面倒なためであって、味や栄養の問題はその種類によっては決して他の動物社会に劣るものではないとある。日本の伝統的食用昆虫にイナゴ、ザザムシ、蜂の子、蚕、孫太郎虫、鉄砲虫などが知られている。此処では、このような虫と違ってコガネムシを食べることについての話をしぼってながめてみたいとおもう。

台湾ではコガネムシ類も煎って醤油をつけて喰う由である。またコガネムシ類(*Adoretus compressus* WEB, *A. convexus* BURMEISTER)が燈火に集まるのをかき集めこれを焼き翅鞘を除いて食べるとあ

る(江崎, 1984)。

イギリス人 W. S. BRISTOWE がシヤムおよびラオスにおいて見聞した事実を記述したものの中に牛や水牛の糞の中から集めた糞虫を盛んに食すると云った記述が紹介されている(W. S. BRISTOWE, 1932)。

V. M. ホールドがまとめている昆虫食に関する一文は仲々面白い話が集められている。その内いくらかを紹介する(1995)。

ローマの美食家たちはコウモリガの幼虫を小麦粉とワインで味付けし食卓を豊かにする習慣があったという。コウモリガ *Cossus* という単語が今日その名で知られる昆虫そのものを指しているのか否かにいささかの疑問があるのだけれどおそらくヨーロッパミヤマクワガタか大きなカミキリムシのたっぷりした幼虫を指すものと思われる。ローマの美食家たちは食べ物に関する限り最高に繊細な舌を持ち、また味を識別する能力に長れていた。そこで振り返るに我々はなぜ彼らが偉大なる珍味とみなしたものに関心を向けようとしなないのだろうかと記している。

ジャワではコフキコガネの一種(*Melolontha hypoleuca*)が住民によって食用にされておりヴィーデューンがそれを丁寧にスケッチして残していると。そして色々の昆虫食の中にコガネムシについて次のようなメニューが出てくる。即ちコガネムシの幼虫の辛味焼き、ヨーロッパミヤマクワガタの幼虫のせトースト、コフキコガネのカレー風味等々が他の昆虫食の中に入っている。実際にこのようにしてコガネムシ類を食べていたのであろうか。お隣の中国でも「」を食すとある。即ちコガネムシ類の幼虫である。一般に中国ではコガネムシの幼虫などは貧しい大衆の食べものであったと云った表現を見ることが出来る。

ここで面白い話が江崎悌三博士によってのべられているので紹介してみる。

カプトムシ幼虫の天ぷら。腹の中に堆肥や泥を一ぱい食べているので、まず魚を料理するように腹を割いて腸管を取除き、それにころもをつけて天ぷらにするのであるが、料理した生身はエビに

彷彿としているとあるが実際に口にして見ると、この虫の白い薄い皮が実はゴムのように硬くて強くてなかなか食べ切れぬ。更にその上驚いたことに腹わたを綺麗に掃除してあって生の時は少しも、そんな臭いがしなかったのに天ぷらにして見ると堆肥の臭いがぶんぶんするので大方の士は一口でやめてしまったとある。このことは江崎博士の教室に一緒におられた安松京三博士も体験をされたようで同博士の著書(1968)の中で同様のことを述べられた箇所がある。

実際問題としてコガネムシを食べている地域はあるであろうし、小さい時からその様な習慣で大きくなった者にとっては何の抵抗も無く受け入れられると思うが、そう云った経験の無い者がそれらを食すると云った行動に簡単に入って行くことは余程の条件が無ければ無理のように思う。

日本では今一つコガネムシを食すると云った風習があるとも思われず、現実には口に出来る状態が無いことは充分わかる。このようにコガネムシを食用に用いることには色々と問題がある。食べることはばかりで無く、漢方薬としてコガネムシを見ることも忘れてはいけぬと考えるが、こちらも色々と効能とか用途、目的等示されているし糞虫まで薬用になるような説明が吾々には今一つ理解し難い面があり"実際に薬としての効能があるのか無いのか"門外漢の者にとってはわかり難い点がある。いずれにしてもコガネムシ類を食べるとか薬用に利用すると云ったことはもっと良く調査しなくてはいけないように思われる。

昆虫界 Vol. 3, No. 17(1935)の中で(p. 294-296)"薬用並に食用昆虫報告"という記事があり、その中で熊本県天草郡御領村の山腰秀芳という人の報告の中に「ヒメコガネの幼虫」やはり焼いて子供の「カン」の薬とする。特に川柳に潜入するものは心臓病の妙薬と称せられると云うのがある(加藤正世博士はコガネムシの幼虫は土中あるいは稀に朽木に棲むものですが柳に寄生するものは他のものではないでせうかとの註をつけておられる)。

一般的にはわが国ではコガネムシを食べるとい

った習慣も無いようだし、これからもこの様なことは無いだろうと考えられるが、世の中がどのように変わって行くかは予測もつかない。或いはコガネムシが吾々の食料の一部になることも皆無だとは云えないように思われたりもする。

<冬虫夏草関係の参考文献>

- 小林義雄・清水大典(1983) 冬虫夏草菌図譜(保育社・大阪)
- 久保道徳(1996) 冬虫夏草(保育社・大阪)
- 松井一郎(1982) 冬虫夏草の一例「ヒメコガネ?」
新昆虫 5(6):4
- 藤波恒雄(1980) 原色和漢薬図鑑(下)(保育社・大阪)
- 大平広士(1972) ハチタケ(冬虫夏草)を採集 植物と自然 6(10):18
- 新宮町教育委員会(1992) 郷土の偉大な博物学者 大上宇一 新宮町文化財調査報告17
- 清水大典(1979) 冬虫夏草 グリーン・ブックス 51(ニューサイエンス社・東京)
- 清水大典(1995) 原色冬虫夏草図鑑(誠文堂新光社・東京)
- 高橋寿郎(1982) オサムシタケとオサムシの畸形 てんとうむし(8):28-29
- 山本義丸(1953) コエビガラスズメとその蛹茸 新昆虫 6(4):46
- 山西 元(1977) 柏原山冬虫夏草採集記 Parnassius (17):1

<"コガネムシを食べるについて"の参考文献>

- W. S. Bristowe(1932) Insects and other invertebrates from human consumption in Siam. Trans. ent. Soc. London Vol. 80:387-404.
- 江崎悌三(1933) 蜘蛛類を薬用または食用とする記録 本草 1(13):1051-1058 (江崎悌三著作集第3巻:253-258, 思索社)
- 江崎悌三(1942) 食蟲習俗考 宝塚昆虫館報 No.

27:1-8 昭和17年11月8日宝塚昆虫館第7回文化講座にての講演要旨(江崎悌三著作集第3巻:思索社 p. 259-269, 1984)

- 江崎悌三(1954) 虫を食べた話 芸林 1(4):4-6 (江崎シャルロッテ編 江崎悌三随筆集 p. 131-136, 北隆館, 1958)
- V. M. ホールト, 友成純一訳(1995) 昆虫食はいかが? ユリイカ 27(10):224-244
- 時事新報(1918) 戦時代用食としてのコガネムシ幼虫のフライ 昆虫世界 22(246):87
- 三橋 淳(1984) 世界の食用昆虫 B6. 270p. 古今書院・東京
- 周 達生(1989) 中国の食文化 B5. 465p. (株)創元社・大阪
- 津田 薫(1935) 民間の昆虫薬 昆虫界 3(20):470
- 渡辺武雄(1982) 薬用昆虫の文化誌 東書選書83 (東京書籍・東京) B6. 210p.
- 山腰秀芳(1935) 民間薬としての昆虫 昆虫界 3(17):296
- 安松京三(1968) 昆虫と人生 B6. 250p. (株)新思潮社刊

(追記)

脱稿後次の文献を見ることが出来たので此処に追記させて頂く。

上本弘幸 広島県産冬虫夏草 (比婆科学 No. 171 :43-50, 1996)

広島県西城町熊野、西城町油木においてケンガタコガネムシタケ、マルミノコガネムシタケと共にコガネムシの幼虫に発生した冬虫夏草をカラー写真をつけて紹介されている。コガネムシについての冬虫夏草の例は大変少ないので貴重な記録と思われるので此処に紹介しておきたい。

(VII・1996)

最近、北寺尾ゲンコツ堂著「ゲテ食」大全が出版された(1996)。昆虫食、特にカブトについてはなかなか面白い。いろいろと参考になる話が出ている。 (IX・1996)